

「戦史叢書」との出会い

国際日本文化センター教授（軍事史学会副会長） 戸部 良一

「戦史叢書」との出会いはいつだったのだろうか。修士論文のテーマが支那事変初期の和平工作だったので、そのときには『支那事変陸軍作戦（1）』と『大本営陸軍部（1）』に目を通していたように思うのだが、記憶はあまりはっきりしない。和平工作は外務省関係が大部分を占めるだろうと思い、指導教授の高坂正堯先生に紹介状を書いていただいて、大学のある京都から郷里の仙台に夏休みに帰省する途中、外交史料館で栗原健先生にお目にかかり、いろいろ教えていただいたのが、つい昨日のことにように思い出される。

そのときの東京滞在中か、あるいは別の機会だったのか記憶はさだかではないが、やはり高坂先生の紹介状を持って、当時市ヶ谷にあった戦史室を訪ねた。ほとんど何も知らない大学院生に会ってくださったのは、室長の島貫武治氏であった。私はおどおどして、ろくに質問もできなかったが、島貫氏は、同じ郷里の出身だということに親しみを感じてくださったように見えた。元関東軍参謀というご経歴は後で知ったのだが、私自身の偏見のせい、イメージがなかなかつながらなかった。「支那事変はね、ベトナム戦争と同じだよ」と言われたのが、いまだに耳に残っている。1970年代に入って間もない頃で、ベトナム戦争が泥沼化していた。

おそらくその折に、島貫氏が森松俊夫氏を紹介して下さったのではないだろうか。そのときは、名著の誉れ高い『北支の治安戦』の執筆者とは知らなかった。とつとつとした語り口で、丁寧に、噛んで含めるように教えてくださった。当時の戦史室は、あまり立派とはいえない建物に収まっていたように記憶しているが、それは外交史料館が出来たばかりで、そのコントラストが鮮明だったからなのかもしれない。その、やや貧相な建物を案内してもらっているとき、森松氏がたまたま廊下か階段で出会った同僚を紹介してくれた。「この人は、私らとは違って、海兵トップだよ」。野村實氏であった。

その後、縁あって防衛大学校に奉職することになり、森松氏や野村氏とは、さまざまな意味で距離が近くなったはずだが、やはり年齢の開きのせい、経験の差のせい、生き字引のようなお二人を前にすると、やはりおどおどしてしまう自分を発見して、苦笑してしまうことが多かった。そのかわり、というのも変な言い方だが、目黒に移ってきて立派な建物に収まった戦史室（戦史部）には、同じ世代の研究者が入り、その点ではとても身近になった。波多野澄雄氏、高橋久志氏、赤木完爾氏の三人である。私にとっては、史料に関していつも有益な情報を提供してくれる得難い先達であり、研究に関しては彼らがどう評価してくれるか常に気になるライバルでもある。彼らが「戦史叢書」を書いたわけで

はないが、かつては——もしかすると今でもそうかもしれないが——荒っぽい読み方しかなかった私でも、当該巻の執筆者たちの歴史観や後世に言い残したかったことに思いが及ぶようになったのは、この三人から戦史部の先輩たちの言葉やエピソードを聞かせてもらうようになってからである。

防大に勤めてからしばらく経ち 40 歳を間近にするようになった頃、不惑になるのだから学位くらいは取らなければ、と思い始めた。テーマはやはり以前から取り組んできた支那事変の和平工作にした。戦史部と外交史料館を訪ねる頻度が高くなったのは、その頃であった。テーマに該当する「戦史叢書」各巻の本文はもとより、巻末に記されている注の根拠史料を、自分の目であらためて確認することが多くなった。確認の作業を通じて、自分なりの読み方や解釈の見直しも試みることができるようになった。

防大生の卒業研究を指導する際、そのテーマが大東亜戦争史に直接関連する場合はもちろん、間接的に関係している場合も、まず「戦史叢書」を読むようアドバイスした。もちろん、注記された根拠史料にあたるため、戦史部まで出掛ける防大生はきわめて稀であった。ところが、十数年前に文系の研究科（総合安全保障研究科）が設置されるようになって、状況が変わった。研究科学生は、修士論文を作成するに当たって、自分のテーマに関連する「戦史叢書」を精読することにとどまらず、注記された根拠史料も閲覧・複写して利用するようになったからである。注記された史料ばかりではない。彼らはそれ以外の関係史料にもよく目を通した。その報告を受けたり複写史料を見せられて、私にも勉強になることが多かった。

こうして私は、自分の研究だけでなく、学生の研究指導にも「戦史叢書」に多くを負うことになった。ただし、学生を指導する過程で、以前からうすうす感じていた「戦史叢書」の限界にも、あらためて気づかされることになった。学生たちは、新鮮な発想から、私が予想もしなかったようなテーマに強い関心を持つことがある。だが、そうした興味深いテーマに、「戦史叢書」が充分には応えてくれない分野があるのである。

よく指摘されることだが、「戦史叢書」は作戦戦闘と戦争・戦略指導に重点が置かれている。そしてその分、動員・復員、兵站、衛生、情報といった分野についての記述が弱い、という印象がぬぐい難い。イギリスやアメリカの公刊戦史に比較すると、その観がいつそう強くなってしまふ。もし今後「戦史叢書」の継続事業として、大東亜戦争史に関する戦史編纂を再開されることがあるならば、例えば『南方の軍政』のように、是非とも作戦戦闘や戦争・戦略指導以外の分野を扱った、言わば機能別の特別巻を作っていただきたい。これができれば、新しい世代の意欲的な研究者の期待に大きく応えることができるだろう。

もうひとつ、検討していただきたいのは、「戦史叢書」の外国語訳である。20年ほど前に北京大学を訪問して、その図書館に『北支の治安戦』の中国語訳——ただしタイトルは

『華北の治安戦』——が所蔵されていることに、少しばかり感動したことがある。日本の公刊戦史を自国語で読みたいと思うのは、おそらく中国の研究者だけではあるまい。日本語の読解能力が充分ではない諸外国の軍事史研究者や日本近現代史研究者が、日本の公刊戦史を、日本語以外の言語で読めるようになるとすれば、日本の近現代史に関する偏見を弱め、バランスの取れた歴史認識を促す効果を生むのではないだろうか。「戦史叢書」はそれだけの内容を持っていると自負してよいと思う。

むしろ「戦史叢書」全巻を一挙に外国語訳するというのは非現実的だろう。まずは、外国人研究者の需要の多い部分から手を付ければよい。あるいは、それだけで、つまり需要の多い一部の巻だけでも充分かもしれない。また、外国語訳といっても、当面は英訳ができれば結構である。英訳ができれば、そこから他の言語に翻訳される可能性も高まるだろう。この事業には、予算の上でも、さらに人的にも時間的にも、厩大なコストがかかることは言うまでもない。しかし、これが長期的に見て、日本の近現代史に関する外国人の理解を豊かにするものならば、日本の公的機関がなすべき戦略的事業とも言えるだろう。

先にも述べたように、研究する者にとって、「戦史叢書」で重要なのは、本文の記述に加えて、巻末の注である。かつては戦史部の閲覧室で、その注の根拠史料へのアクセスに慣れるまで、かなりの時間がかかった。現在はもっと分かりやすくなっているとは思いますが、この点も検討していただければ有難い。「アジア歴史資料センター」のWEB上にすべての史料をアップロードする必要はない。「密大日記」と「公文備考」で充分ではないだろうか。時代の趨勢に乗り遅れた者の言い草かもしれないが、研究はやはり足で稼ぐものだと思う。戦史部等の史料館に足を運んで、生の史料を直接手にし、読んでみるべきだと思う。それだけに、戦史部のファイリング・システムを含む史料へのアクセス手続きが、もっと研究者・利用者向きになされるべきではないだろうか。

だいぶ望蜀の要求を書き連ねてしまったような気がする。それもこれも、これまで「戦史叢書」や戦史部のスタッフと史料にお世話になっているがゆえの要望だと、ご寛恕いただきたい。

今年の3月まで防大に勤務している間、「戦史叢書」が手近にあるのは当たり前であった。図書館にも、学科の図書室にも、どこにもあってすぐ利用することができた。4月に国際日本文化研究センター（日文研）に移ってきて、日本「文化」だけが研究対象とされていると思い込んでしまい、「戦史叢書」があるかどうか心配であった。しかし、日文研の図書館にも、「戦史叢書」のほぼ全巻が揃っていた。それを見て何となく安心しているところである。